

と保育士・職員を観察対象とした。また0歳児担当保育士への聞き取り調査、調査実施前14日間の食事記録（一人ひとりの子どもの食事時間、食事介助を行った者、食事の様子）の収集を合わせて実施した。その結果は概ね以下の通りである。

1) 食事における担当制といってもさまざまなバリエーションが存在した。・担当が「1対1」で食事の介助を行う、・食事における子どもの人数を月齢・食事の状況により1対1、1対2、1対3と変えていく、・高月齢では担当が担当グループのテーブルにつく、・子どもの状況を考慮し、状況によっては他の担当が保育を交代する「ゆるやかな担当制」などである。

2) 子どもたちが快適に過ごすことができるか否かは、・月齢差があまりない子どもたちの食事

時間の重なりの中なかで、誰がどのような体制において食事を進めていくのか、生活をどのように組むのか、・担当が食事介助に当たっている間、他児のあそびをどう保障するのか、・あそびと食事の環境をどのように設定するのか、・子どもがこだわる場合にどう対応するのか等の点と、深く関わっていることが明らかになった。またフリー保育士の配置など保育条件も保育のあり方と深く関わっていた。今後、異なる時期、異なる体制や条件のもとで検討し、より良い方法を探っていきたい。

これらの結果の一部を「乳児保育の方法に関する一考察（4）」として、日本保育学会第58回大会（2005年5月）において発表する予定である。

社会とヒューマニズム、地域の子育て支援 —— みんなで育て合う活動の広がり ——

保育科 佐々加代子

2年計画の1年目として以下のことをまとめた。

1) 政府の子育て支援政策の概況と課題、2) 子育て支援策の一つとしてのファミリー・サポート・センター事業の事例として所沢市の取組を、その事業の始まりからの経緯、活動の経過上見出してきた体制づくりと課題のある援助事例を詳細に検討、3) NPO法人の活動には清瀬市の子育てネットワーク・ピッコロを、4) 子育て広場は小平市内で活動している、子育て広場きららを取り上げた。5) それぞれの子育て支援活動において、それらの活動がそれぞれの地域で広がりを見せてきたのは、それぞれの活動の「核」になっている「人物」が居たことによると思われたため、所沢市の森氏、小平市の野村氏、清瀬市の小俣氏らに

ついて、背景の思想を探っていった。彼女たちとともに活動をすすめてきた人々たちへのヒアリングを重ねた。

1) から4) については、「みんなで育て合う地域の子育て支援の実践と課題」、犀書房（2004年7月17日刊行）、にまとめている。

5) で得られたヒアリング内容、活動の実践とその核になった人物についての詳細な検討が残された課題になる。2005年度には、子育て支援の活動・事業の形態が異なるものの、それぞれの人を支えた思想・考えの分析、およびその人たちが地域に広がりをもたらしてきた背景の共通性についての検討にある。